

生徒指導の現状と課題 —いじめへの対応を取り上げて—

伊 藤 敦 美

1. 研究の問題と目的

1980年代半ばに日本各地でいじめを苦にした児童生徒の自死が相次いだことをきっかけに、いじめは社会問題の一つとなり、現在においてもなお教育現場の重大な課題としてあり続けている⁽¹⁾。齊藤は「人権をもっているが未成熟な子どもにとっては、学校の条件に自分の精神的、身体的状態を順応させ、耐えなければならないのが学校である」と子どもたちの置かれている厳しい現状を指摘している⁽²⁾。

このような状況を受けて、2013年6月にはいじめ防止対策推進法が制定された。同法第1条においてその目的は「いじめが、いじめを受けた児童等の教育を受ける権利を著しく侵害し、その心身の健全な成長及び人格の形成に重大な影響を与えるのみならず、その生命又は身体に重大な危険を生じさせるおそれがあるものであることに鑑み、児童等の尊厳を保持するため、いじめの防止等（いじめの防止、いじめの早期発見及びいじめへの対処をいう。以下同じ。）のための対策に関し、基本理念を定め、国及び地方公共団体等の責務を明らかにし、並びにいじめの防止等のための対策に関する基本的な方針の策定について定めるとともに、いじめの防止等のための対策の基本となる事項を定めることにより、いじめの防止等のための対策を総合的かつ効果的に推進すること」と定めている。つまり、国、地方公共団体、学校のそれぞれの責務を明確にし、一体となっていじめ防止に努めることが求められている。そして、第2条において「いじめ」とは、「児童等に対して、当該児童等が在籍する学校に在籍している等当該児童等と一定の人的関係にある他の児童等が行う心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものを含む。）であって、当該行為の対象となった児童等が心身の苦痛を感じているものをいう」と定義されている。

では、実際の学校現場で教師たちはどのようにいじめ問題に取り組んでいるのだろうか。

児童生徒間のいじめに対する教員の認識について研究を行った久保によれば、いじめ問題の困難さには「いじめかそうでないかの鑑別の難しさ」

「発見の困難さ」「いじめ被害者と加害者の認識」の3点があるという。久保の調査では、教員は、いじめへの対応としてまずは情報収集を行い、次の対応に移っていることが推測されるという。確認された事実に基づいて指導方針を立てることは理にかなっており、軸のぶれない生徒指導の実現が期待できる一方で、いじめは教員の目前で発生するわけではなく陰で発生するため、教員がその事態の発生及び解消を明確に捉えて確認することが難しいと指摘している⁽³⁾。

平成27年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」結果⁽⁴⁾によれば、「いじめ発見のきっかけ」は、学級担任が発見11.8%、学級担任以外の教職員が発見2.4%、養護教諭が発見0.4%、スクールカウンセラー等の相談員が発見0.2%となっており、同調査からも教師がいじめを発見して対応することは困難であると考えられる。その一方で、アンケート調査など学校の取組により発見は51.4%（小学校：55.5%、中学校：40.5%、高等学校：55.0%）と、アンケート調査等の学校の取組は調査項目中では最もいじめの発見に寄与している。

しかしながら、「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」において報告されるいじめ被害は教師の報告においてなされるため、実際のところどの程度実態を反映したものであるのかという疑問も呈されている⁽⁵⁾。そのため、近年、児童生徒を対象にしていじめの実態や関連する要因について検討が行われるようになってきている⁽⁶⁾。いじめ被害の実態と教師への支援要請について児童生徒を対象に調査を行った加藤らの研究⁽⁷⁾によれば、小学校・中学校ともに通常学級と特別支援学級における児童生徒がとらえるいじめの実態と教師がとらえるいじめの実態には大きな乖離があるという。

こうした先行研究によって、児童生徒の側からみたいじめの実態が明らかになってはいるものの、学校や教師のいじめへの対応について児童生徒がどのように認識しているのかは明らかにされてはいない。そこで本研究では、大学生を対象として、小学校、中学校、高等学校⁽⁸⁾におけるいじめに関する体験及びいじめ防止のための学校や教師の取り組みについての認識を調査することを通して、児童生徒の側からみたいじめへの対応についての現状を明らかにすることを目的とする。さらに、大学生たちの体験を通して、学校現場におけるいじめ問題に対する指導をより効果的なものとするために求められていることを明らかにする。

2. 方法

2-1 対象者及び調査時期

新潟県内の大学1～4年生112人を対象に、2016年11月に質問紙による調査を実施した。112人のうち67人は高等学校出身、45人は高等専門学校⁽⁹⁾出身である。

2-2 調査の概要

調査用紙を大学の授業時間に配布し、終了後回収する方法で調査を実施した。調査用紙は表紙といじめに関する調査から成っている。いじめに関する調査は、Ⅰ「あなた自身のいじめに関する質問」、Ⅱ「他者に対するいじめに関する質問」、Ⅲ「いじめ予防のための指導に関する質問」の3項目30の設問から成っている。項目ごとの設問内容を表1～3に示す。

3. 結果

結果の分析は、Ⅰ「あなた自身のいじめに関する質問」、Ⅱ「他者に対するいじめに関する質問」、Ⅲ「いじめ予防のための指導に関する質問」の3つの調査項目ごとに行った。以下、順に結果を述べる。

3-1 あなた自身のいじめに関する質問（表1）

問1「あなたはいじめを受けたことがありますか」に「はい」と答えた者は調査対象者（112人）のうち18人（16.1%）だった（表4）。この18人を分析対象とした。結果を表5、図1、図2に示す。

いじめを受けた時期をたずねた問2（複数回答）では、小学校高学年から中学校にかけてが多く、特に中学2年生が多かった（図1）。受けたいじめの様態（問3：複数回答、図2）としては、①「冷やかしかからかい、悪口や脅し文句、嫌なことを言われる」が、小学校、中学校、高等学校すべてで最も多かった。①が最も多いという結果は、平成27年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」の結果と同様である。次に、②「仲間外れ、集団による無視をされる」が続く。そして、中学校では、③「軽くぶつかられたり、遊ぶふりをして叩かれたり、蹴られたりする」、④「ひどくぶつかられたり、叩かれたり、蹴られたりする」、⑦「嫌なことや恥ずかしいこと、危険なことをされたり、させられたりする」が続く。小学校では、①、②に次いで多いのは、⑧「パソコンや携帯電話等でひぼう中傷やいやなことをされる」である。さらに、⑦「嫌なことや恥ずかしいこと、危険なことをされたり、させられたりする」も見られた。

高等学校・高専は①が2回という結果だった。

「いじめられていた時、教師が気づいていたか否か」(問4、表5)については、「はい」と答えた学生は2人(11.1%)であった。先に示した「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」結果において、教師による発見が困難であることが示されていたが、児童生徒の側から見ても、辛い状況を多くの教師は気づいていなかったようである。「教師が気づいていた」と答えた2人のうち、1人は担任教師、もう1人は部活動の顧問が気づいていたと回答している(問5)。

「いじめられていることを学校の教職員に相談したか否か」(問6、表5)については、「はい」と答えた学生は4人(22.2%)であった。この学生たちのうち2人は担任教師、1人は社会科教師、もう1人は部活動顧問に相談をしたと回答している。担任に相談したのは「相談するように言われたから」「担任だったから」、社会科教師に相談したのは「最も話しやすかったから」、部活動顧問に相談したのは「問題が部活内のことだったから」とそれぞれ答えている。

「教職員以外の誰かに相談したか否か」(問7、表5)については、「はい」と答えた学生は7人であった(38.9%)。7人のうち、5人は親・母親(親と親戚:1人を含む)に相談し、2人は友人に相談したと回答している。親に相談したのは、「学校であったことはすべて親に相談する」「頼れる」「悲しかったので話を聞いてほしかった」「親には心配をかけるものと思っていた」からだという。そして、友人に相談したのは、「身近な友人に別な友人への不満を話したかった」「うまくいかない友人ではなく他の友人と仲良くした」からとのことであった。

「学校、学年、クラスではいじめをとめるために何か対策を講じてくれたか否か」(問8、表5)については、1人(5.6%)のみが「はい」と答えている。講じられた対策について、具体的には覚えていないとのことであるが、その際の対策ではいじめの状況は改善しなかったという。

「自分ではいじめをとめるために何か対策を講じたか否か」(問10、表5)については、8人(44.4%)が「はい」と答えている。具体的な対策(問11)としては、「いじめられた原因を考え、自分を変えた」「自分の身の振りを変えた」という自分を変えることでいじめをとめようとした者や、「話さない、謙虚に、出しゃばらない」「目立たないようにした」というようになるべく前に出ないことでいじめの対象になることを避けようとしたことが挙げられている。また、「いじめをしているグループには近づかない」「できるだけ関わりを断った」といったいじめグループを避ける方法や、

逆に「正当防衛をした」「ぶっとばした。その後何もしてこなくなった」という方法をとった者もいた。

「いじめられている時、学校、学年、クラスでどのようなことをしてほしかったか」(問 12)については、教師に対して「『いじめは許さない』ことを明言してほしかった」「きちんと叱ってほしかった」「気にかけてほしかった」という回答や、教師やクラスの友人に対して「いじめをしている人を止めてほしかった」、クラスの友人に対して「仲良くしてほしかった」「何か言ってほしかった」等の回答があった。

より具体的に「いじめられている時、誰に、どのようなことをしてほしかったか」(問 13)を問う質問では、「担任」に「守っていじめの人を叱ったほしかった」という回答や、「友人」に「声をかけてほしかった」「かばってもらいたかった」「一緒にいてほしかった」「注意してほしかった」という回答、「見ている人、関係のない人」に「いじめを止めてほしい、割って入ってほしかった」という回答があった。

問 12、問 13 の回答から、直接誰かに相談することは難しいが、教師やクラスの友人たちに何とかしてほしいと思っていた切実な気持ちが伝わってくる。

問 12、問 13 とは逆に「してほしくなかったこと」を質問 14、15 では問うた。

「いじめられている時、学校、学年、クラスでしてほしくなかったことはどんなことか」(問 14)については「いじめの話を集会で取り上げること」「学年全体への指導」「間接的にいじめをやめさせようとする授業。誰の心にも響かない」「誰とでも話をするを強要する」「過剰に反応すること」「『いじめはない』と思い込んでほしくなかった」等が挙げられた。

「いじめられている時、周りの人にしてほしくなかったことはどんなことか」(問 15)については、「見て見ぬふり」「無視」「いじめに対して怒ったときに笑うこと」「嘘交じりのうわさを信じること」「過剰に反応すること」等が挙げられた。

3-2 他者に対するいじめに関する質問 (表 2)

問 16「あなたはいじめられている人をみたり聞いたりしたことがありますか」に「はい」と答えた者は 54 人 (48.2%) だった (表 4)。この 54 人を分析対象とした。結果を表 6、図 3、図 4 に示す。

いじめを見たり聞いたりした時期をたずねた問 17 (複数回答) では、いじめを受けた数 (問 1) と同様に小学校高学年から中学校にかけてが多

く、特に中学2、3年生が多かった（図3）。「あなた自身のいじめに関する質問」においても中学2年生でいじめを受けたという回答が最多であり、平成27年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」において教師が把握した学年別いじめの認知件数が中学1年生において最も高いという結果とは異なっている。児童生徒を対象とした被害経験の調査と教師による認知件数の調査の結果から異なる実態が見えるという研究報告⁽¹⁰⁾もあるため、この点については今後更なる研究の必要性が示唆される。

見たり聞いたりしたいじめの様態（問18：複数回答、図4）としては、①「冷やかしからかい、悪口や脅し文句、嫌なことを言われる」が、小学校、中学校、高等学校すべてで最も多かった。①が最も多いという結果は、平成27年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」の結果と同様である。この結果も受けたいじめの様態（図2）と同様である。次いで、②「仲間外れ、集団による無視をされる」、そして、③「軽くぶつかられたり、遊ぶふりをして叩かれたり、蹴られたりする」と続く。さらに、中学校では、⑦「嫌なことや恥ずかしいこと、危険なことをされたり、させられたりする」、⑥「金品を隠されたり、盗まれたり、壊されたり、捨てられたりする」、④「ひどくぶつかられたり、叩かれたり、蹴られたりする」が多い。高等学校・高専は、①、②に次いで多いのは、⑦と⑧「パソコンや携帯電話等でひぼう中傷やいやなことをされる」であった。

「周りにいじめられている人がいた時、教師は気づいていたか否か」（問19、表6）については、32人（59.3%）が「はい」と答えている。「気づいていたのは学級担任か否か」（問20）については、学級担任と答えたのは25人（78.1%）、学級担任と担任以外と答えたのは6名（18.8%）、担任以外と答えたのは1人（3.1%）だった。担任以外の教師としては、部活動顧問、学年主任、他のクラスの教師、体育教師等が挙げられた。I「あなた自身のいじめに関する質問」の問4でいじめられていた際に「教師が気づいていたか否か」について18人の調査対象者のうち16人（88.9%）が「いいえ」と答えている（問4、表5）ことと比較すると、こちらのほうは「気づいていた」という回答が多かった。

「学校、学年、クラスでは何か対策を講じたか否か」（問21、表6）については、29人（53.7%）が「はい」と答えている。いじめを見たり聞いたりした人のうち5割以上は何らかの対策が講じられていたと認識していた。I「あなた自身のいじめに関する質問」の問8でいじめられていた際

に「学校、学年、クラスではいじめをとめるために何か対策を講じてくれたか否か」について17人(94.4%)が「いいえ」と答えている(表5)ことと比較すると、問21と同様にこちら「対策を講じた」という回答が多かった。

具体的な対策(問22)としては、「学年集会」、「学級会、クラス・HRでの話し合い」、「学級担任からの話」(説教も含む)、「面談」「いじめ防止の授業」「アンケート調査」等が挙げられた。「学年集会」を挙げた者の多くは、その後も状況は変わりなかったと回答している。「学級会、クラス・HRでの話し合い」は、本人が同席する場合と同席しない場合とにわけられる。クラスでの話し合いがもたれた場合、状況が改善した例も挙げられたが、いじめはなくなりより陰湿な目立たないものになった、いじめはなくなったが被害者が孤立した、対策直後は効果があったが時間がたつと元に戻った等ネガティブな結果が多く見られた。I「あなた自身のいじめに関する質問」の間14でいじめられていた際に「してほしくなかったこと」として「いじめの話を集会で取り上げること」「学年全体への指導」「間接的にいじめをやめさせようとする授業。誰の心にも響かない」等が挙げられていることから考えると、これらの対策はネガティブな結果を招くことに加えて、いじめ被害者に対しても精神的な負担を与える事になると考えられる。

一方で、「面談」の場合には、いじめは少なくなった、いじめはなくなった等ポジティブな結果が多くみられた。アンケート調査が行われた場合もあったようだが、アンケート調査を実施してもとくに状況には変化はなかったようである。

最後に「いじめられている人を見た時何かしたか否か」を問うた(問23)。結果を表7に示す。分析対象者の半数以上(28人、51.9%)が「何もしなかった」と回答している。次いで、6人(11.1%)が「助けた・味方になった」、4人(7.4%)が「いつも通り接した」と回答している。「いじめに加担した」という回答も2人(3.7%)あった。若干を除いて、これらの回答は、I「あなた自身のいじめに関する質問」の間13でいじめられた際に「してほしかったこと」として挙げられている、「友人」に「声をかけてほしかった」「かばってもらいたかった」「一緒にいてほしかった」「注意してほしかった」、「見ている人、関係のない人」に「いじめを止めてほしい、割って入ってほしかった」という気持ちとは反対の行動である。むしろ、I「あなた自身のいじめに関する質問」の間15でいじめられている時、周りの人に「してほしくなかったこと」として挙げられている「見

て見ぬふり」「無視」に該当する行為である。

3-3 いじめ防止のための指導に関する質問（表3）

アンケートの回答者全員（112人）を分析の対象とする。結果を表8～11に示す。

「学校でのいじめ防止（予防）のための指導」（問24）については、小学校時は66人（58.9%）、中学校時は66人（58.9%）、高等学校時は32人（47.8%）、高専時は10人（22.2%）がそれぞれの学校に在籍中にいじめ予防のための何らかの指導があったと回答している。具体的には、アンケート調査、授業（道徳・保健体育等）、講演会・講話・セミナー等、全校・学年集会においていじめ防止のための指導が行われたと回答している（表9）。この結果から、小中学校に関しては約6割、高等学校に関しては約5割の学生が各学校のいじめ防止のための取り組みを認識していたといえる。しかしながら、学生の回答を見る限り、いじめ防止のための取り組みとは認識されていない他の取り組みもあったのではないかと推測される。高専は他の学校に比べて挙げられている数が少ないが、これは、いじめ防止のための取り組みとは認識されていない他の取り組みがあった可能性に加えて、学校の特質上、生徒指導には力点を置いていなかった可能性が示唆される。

「学校で行われたアンケート調査」（問25）については、小学校時は85人（75.9%）、中学校時は96人（85.7%）、高等学校時は55人（82.1%）、高専時は25人（55.6%）がいじめの調査のための何らかのアンケートが実施されたと回答している（表8）。問24と比較すると大幅に増えている。実際には、アンケート調査は学校全体の取り組みであると考えられるので、問24で得られた数より多くの学校でアンケート調査を含むいじめ防止のための取り組みが行われているといえる。

アンケートの形態は、小学校、中学校、高等学校、高専で圧倒的に無記名が多い。また、選択式、あるいは選択式+記述式で実施している学校が多い（問26、表11）。アンケート調査については、被害者や加害者の発見が目的ではなく、いじめがどの程度起きているのかを定期的に把握し、いじめが起きにくくなるような取り組みを意図的・計画的に行って、その取り組みの成果を評価し改善するために「無記名アンケート」を実施することが推奨されている⁽¹¹⁾ ことと一致している。

「学級でのいじめ防止（予防）のための指導」（問27）については、小学校時は40人（35.7%）、中学校時は39人（34.8%）、高等学校時は14人

(20.9%)、高専時は6人(13.3%)がそれぞれの学級でいじめ予防のための何らかの指導があったと回答している(表8)。具体的には、学級会・LHR、授業(道德・保健体育等)、担任の話、個別指導・注意・面談、学級独自のアンケート等が挙げられている(表10)。

いじめについては、従来、一部にいじめられる側にもそれなりの理由や原因があるとの意見が見受けられることがあったことから、「いじめられる方にも問題があるという趣旨の教師の発言を聞いたことがあるか否か」(問28)の問を設けた。この問いに「はい」と答えたのは15人(13.4%)だった。15人(13.4%)ではあっても、この発言を聞いたことがある学生が存在するということは、いじめをいじめられる側の責に帰すことは断じてあってはならないということを鑑みれば、決して見過ごすことはできない結果である。

最後に、「いじめ被害を避けるためにしていたこと、心がけていたこと」(問30)を問うた。その結果、他人の気持ちになる、自分がやられて嫌なことはしない、皆で仲良くする、相手が嫌な気持ちにならないように接する、自分の発言には注意する、人が嫌がることをしないとといった人間関係を円滑に進めるために有効な手段を選択し、実践した学生がいた。一方で、でしゃばらないで普通にいる、個性を出しすぎない、自分の素は出さない、目立たない、人とかかわる頻度を減らす、妬まれない、意志表示をそんなにしないとといった、自らの個性を抑えて前に出すぎることのないように慎重に過ごしてきた学生たちの姿も見えた。クラス内での話に注目して、どういうグループができてどういう関係なのかを知ったという学生もいた。先に、齊藤が「人権をもっていても未成熟な子どもにとっては、学校の条件に自分の精神的、身体的状態を順応させ、耐えなければならないのが学校である」⁽¹²⁾と述べていることを引用したが、これらの回答から、まさに、自分が置かれている学校、クラスの条件に自分の精神的、身体的条件を順応させ、その中で生き抜くすべを身に付けてきた姿が見られる。

4. 結果の考察と今後の課題

本研究では、いじめへの対応についての現状を明らかにすること、及び、学校現場におけるいじめ問題に対する指導をより効果的なものとするために求められていることを明らかにすることを目的として行った。この目的に関わって、①いじめについての相談、②子どもたちが教師に求めているいじめ対応について調査結果を踏まえて考察する。

まず、①いじめについての相談について考察する。問4から問7の調査

結果を見ると、分析対象とした18人の学生のうち2人は、問4、6、7でいずれも「はい」と答えている。したがって、この2人はいじめに気付いてくれた教師がいて、いじめについて相談する教師がいて、親にも相談できる環境であった。そして、他の2人は、問4、7で「いいえ」と答えたが問6で「はい」と答えている。したがって、この2人はいじめられていることを教師に気づいてはもらえなかったが、自分から相談することのできる教師がいた。さらに、5人は問4、6で「いいえ」と答えたが、問7で「はい」と答えている。したがって、いじめに気付いてくれた教師、相談することのできる教師はいなかったが、親や友人には相談できた。しかしながら、分析対象者の半数である9人は、誰にも気づいてもらえず、教師にも、教師以外の誰かにも全く相談をしていなかったことが明らかになった。

国立教育政策研究所が教師対象に行った意識調査によれば、「いじめの加害者になる子供は、なんとなく見当がつく」「いじめの被害者になる子供は、なんとなく見当がつく」という意見に対して、「賛成」または「まあ賛成」と回答した教師は全体の半分になったという⁽¹³⁾。しかしながら、本調査では分析対象とした者の半数が誰にも気づいてもらうことなく、一人でいじめに耐えたことが明らかになった。本稿3-2において、児童生徒を対象とした被害経験の調査と教師による認知件数の調査の結果から異なる実態が見えるという研究報告について述べたが、教師側のこうした実態も児童生徒のいじめ被害を見逃すことや、児童生徒が教師にいじめの被害を相談できないことに関係していると考えられる。

次に、②子どもたちが教師に求めているいじめ対応について検討する。

問12、13では、いじめられている時、教師に対して「『いじめは許さない』ことを明言してほしい」「守って、いじめる人を叱ってほしい」「いじめをしている人を止めてほしい」「気にかけてほしい」という回答が挙げられている。このように回答した学生たちは、いじめられている時、教師は、「いじめは許さない」と明言することはなかった、守られている感じを持てず、いじめをしている人を叱ったり、止めたりしていなかった、いじめられている自分のことを気にかけてくれてなかったと認識していたと考えられる。このような状況では、教師にいじめのことを相談しようとは思にくいだろう。

さらに、いじめを改善するために採られていた具体的な対策である「学年集会」、「学級会、クラス・HRでの話し合い」、「学級担任からの話」は、いじめられていた際に「してほしくなかったこと」として挙げられている「いじめの話を集会で取り上げること」「学年全体への指導」「間接的にい

じめをやめさせようとする授業。誰の心にも響かない」とほぼ一致している。このことから、教師には相談できないと考えることは必至であろう。

Ⅱ「他者に対するいじめに関する質問」(問 21、22)において、「面談」の場合には、いじめは少なくなった、いじめはなくなった等ポジティブな結果が多くみられたことから、学年や学級に対する集団指導を行う以前に、教師による個別面談を重ねていくような指導が求められていると考えられる。

クラスの友人に対しても、「仲良くしてほしかった」「何か言ってほしかった」「かばってほしかった」といった気持ちを持っていたことから、友人にも相談できる環境でなかったことが推測できる。澁澤によれば、近年学級は「相互承認の場」から「気遣いの場」へ変容しているという。また、このような教室の中で、子どもたちは「居場所」を作る工夫をしているという。それは、キャラを演じる(=「偽りの自己」)ことであるという。「ありのままの自分」を守るために、とりあえずの役割でキャラを設定し、自分を防御するのである⁽¹⁴⁾。問 30 において、いじめ被害を避けるためにしていたこと、心がけていたことを問うたところ見られた、でしゃばらないで普通でいる、個性を出しすぎない、自分の素は出さない、目立たない、人とかかわる頻度を減らす、妬まれない、意志表示をそんなにしないといった、自らの個性を抑えて前に出すぎることのないように慎重に過ごしてきた学生たちの姿がまさにこれに相当すると考えられる。

いじめは、子どもの健全な成長にとって看過できない影響を及ぼす深刻な問題であるとともに、人権に関わる重大な問題である。いじめの問題については、まず誰よりもいじめ側の側が悪いのだという認識に立ち、毅然とした態度で臨むことが必要である。いじめは卑劣な行為であり、人間として絶対に許されないという自覚を促す指導を行い、その責任の所在を明確にすることが重要である。社会で許されない行為は子どもでも許されないものであり、児童生徒に、何をしても責任を問われないという感覚を持たせることは教育上も望ましくないと考えられる⁽¹⁵⁾という基本に教師自身が立ち返り、学級が本来の姿である「相互承認の場」となるような学級経営が求められる。こうした学級がつくられることによって、いじめ問題に対する指導がより効果的なものになるであろう。

本研究より、教師自身のいじめの実態把握に関する意識改革及び学級が本来の姿である「相互承認の場」となるような学級経営の必要性が示唆された。しかしながら、現在講じられている方策「学年集会」、「学級会、クラス・HR での話し合い」、「学級担任からの話」ではいじめは改善されな

いことに加えて、いじめ被害者の精神的な負担になることが明らかになった。今後は、いじめの実態把握に関する教師の意識改革及び学級が「相互承認の場」となるような学級経営を可能にする具体的な方策を検討することが第1の研究課題である。

また、高等学校に在籍していた学生と高専に在籍していた学生で、学校におけるいじめ予防及び学級におけるいじめ予防の取り組みの認識に大きな差があることが見出された。高等学校と高専では教育目的が異なるため、生徒指導の在り方も異なっていることがその要因の一つとして考えられる。しかしながら、在籍している生徒・学生の発達段階に違いはないため、起こり得る問題は類似していると考えられる。今後は、高専における生徒指導にも焦点を当てて、生徒指導の課題について考えることが第2の研究課題である。

<註>

- (1) 久保順也「児童生徒間のいじめに対する教員の認識－テキスト分析によるカテゴリ化の試み」『宮城教育大学研究紀要』第50巻、2015年、267頁。
- (2) 齊藤勉『「いじめ問題」から授業・学校改革を考える』明治図書、1997年、23頁。
- (3) 久保順也「児童生徒間のいじめに対する教員の認識－テキスト分析によるカテゴリ化の試み－」、268-275頁。
- (4) 文部科学省初等中等教育局児童生徒課「平成27年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」2016年10月27日。
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/28/10/_icsFiles/afieldfile/2016/10/27/1378692_001.pdf (2016年11月30日取得)
- (5) 清水賢二『いじめの深層を科学する』ミネルヴァ書房、2013年、尾木直樹『いじめ問題をどう克服するか』岩波書店、2013年等。
- (6) 加藤弘道「いじめ被害の実態と教師への支援要請：通常学級と特別支援学校の双方に注目して」『子ども発達臨床研究』第8号、2016年、1 - 12頁、村山恭朗・伊藤大幸・浜田恵・中島俊思・野田航・片桐正敏・高柳信哉・田中善大・辻井正次「いじめ被害・被害と内在化／外在化問題との関連性」『発達心理学研究』26(1)、13 - 22頁等。
- (7) 加藤弘道「いじめ被害の実態と教師への支援要請：通常学級と特別支援学校の双方に注目して」、10頁。
- (8) 本調査の対象者の中には、高等専門学校卒業生も含まれていることから、高等学校及び高等専門学校を調査・分析の対象とする。
- (9) 以下では、高専と表記する。
- (10) 加藤弘道「いじめ被害の実態と教師への支援要請：通常学級と特別支援学校の双方に注目して」、1 - 12頁、国立教育政策研究所「生徒指導リーフ 中1ギャップの真実」国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター、Leaf.15、2015年3月等。
- (11) 国立教育政策研究所「生徒指導リーフ いじめアンケート」生徒指導・進路指導研

究センター、Leaf4、2015年3月。

- (12) 齊藤勉『「いじめ問題」から授業・学校改革を考える』、23頁。
- (13) 国立教育政策研究所「生徒指導リーフ いじめアンケート」。
- (14) 澁澤透「子どもの現状と生徒指導の課題－社会の「個人化」を子どもの「自立」につなぐために」『南九州大学人間発達研究』第2巻、2012年、86頁。
- (15) 文部省初等中等教育局長通知「いじめの問題の解決のために当面取るべき方策等について」1995年3月13日。

表1 I「あなた自身のいじめに関する質問」の調査項目

-
- 質問1 あなたは、いじめを受けたことがありますか
- 質問2 それはいつ頃ですか。学校、学年を書いてください（複数回答可）
- 質問3 どのようないじめでしたか。いじめの8様態（①冷やかしかからかい、悪口や脅し文句、嫌なことを言われる、②仲間外れ、集団による無視をされる、③軽くぶつかられたり、遊ぶふりをして叩かれたり、蹴られたりする、④ひどくぶつかられたり、叩かれたり、蹴られたりする、⑤金品をたかられる、⑥金品を隠されたり、盗まれたり、壊されたり、捨てられたりする、⑦嫌なことや恥ずかしいこと、危険なことをされたり、させられたりする、⑧パソコンや携帯電話等でひぼう中傷やいやなことをされる）及び⑨その他から選択（複数回答可）
- 質問4 あなたがいじめられていた時、教師は気づいていましたか
- 質問5 質問4で「はい」と答えた方に質問します。気づいていたのは学級担任ですか、それとも担任以外の教職員ですか？ 担任以外の場合には具体的に書いてください
- 質問6 いじめられていることを学校の教職員に相談しましたか？ いずれかに○をつけてください。「はい」の人は誰に相談したかと、その人に相談した理由を具体的に書いてください
- 質問7 質問6で「いいえ」と答えた方に質問します。教職員以外の誰か（親、兄弟、友人等）に相談しましたか。いずれかに○をつけてください。「はい」の人は誰に相談したかと、その人に相談した理由を具体的に書いてください
- 質問8 学校、学年、クラスではいじめをとめるために何か対策を講じてくれましたか
- 質問9 質問8で「はい」と答えた方に質問します。それはどのような対策でしたか？ また、採られた対策によっていじめはどうなりましたか
- 質問10 自分ではいじめをとめるために何か対策を講じましたか
- 質問11 質問10で「はい」と答えた方に質問します。それはどのような対策でしたか？ また、自分で対策を講じたことによっていじめはどうなりましたか
- 質問12 あなたはいじめられている時、学校、学年、クラスでどのようなことをしてほしかったですか
- 質問13 あなたはいじめられている時、誰に、どのようなことをしてほしかったですか
- 質問14 あなたはいじめられている時、学校、学年、クラスで、してほしくなかったことはどんなことですか
- 質問15 あなたはいじめられている時、周りの人に、してほしくなかったことはどんなことですか
-

* 質問1の後に「質問1ではいと答えた方は、次の質問2～15も引き続き答えてください。いいえの方は、質問2～15をとばして、質問16から答えてください」の指示がある

* 質問1、4、6、7、8、10は「はい」「いいえ」の2件法を用いた

表2 II 「他者に対するいじめに関する質問」の調査項目

-
- 質問16 あなたは、いじめられている人を見たり聞いたりしたことがありますか
- 質問17 それはいつ頃ですか？ 学校、学年を書いてください。（複数回答可）
- 質問18 どのようないじめでしたか。いじめの8様態（①冷やかしやからかい、悪口や脅し文句、嫌なことを言われる、②仲間外れ、集団による無視をされる、③軽くぶつかられたり、遊ぶふりをして叩かれたり、蹴られたりする、④ひどくぶつかられたり、叩かれたり、蹴られたりする、⑤金品をたかられる、⑥金品を隠されたり、盗まれたり、壊されたり、捨てられたりする、⑦嫌なことや恥ずかしいこと、危険なことをされたり、させられたりする、⑧パソコンや携帯電話等でひぼう中傷やいやなことをされる）及び⑨その他から選択（複数回答可）
- 質問19 あなたの周りにいじめられている人がいた時、教師は気づいていましたか
- 質問20 質問4で「はい」と答えた方に質問します。気づいていたのは学級担任ですか、それとも学級担任以外の教職員ですか？ 担任以外の場合には具体的に書いてください
- 質問21 学校、学年、クラスでは何か対策を講じましたか
- 質問22 質問21で「はい」と答えた方に質問します。それはどのような対策でしたか？ また、採られた対策によっていじめは怎么样了しましたか
- 質問23 あなたはいじめられている人を見た時何かしましたか。それはどのようなことですか
-

* 質問16の後に「質問16ではいと答えた方は、次の質問17～23も引き続き答えてください。いいえの方は、質問17～23をとばして、質問24から答えてください」の指示がある

* 質問16、19、21は「はい」「いいえ」の2件法を用いた

表3 Ⅲ 「いじめ予防のための指導に関する質問」の調査項目

- 質問24 学校ではいじめ防止（予防）のためのどのような指導が行われていましたか
- 質問25 学校ではいじめについてのアンケート調査は実施されていましたか
- 質問26 どのようなアンケートでしたか
- 質問27 学級ではいじめ防止（予防）のためのどのような指導が行われていましたか
- 質問28 いじめに関する指導の際に「いじめられる方にも問題がある」という趣旨の教師の発言を聞いたことはありますか
- 質問29 あなた自身は、いじめ被害を避けるためにしていたこと、心がけていたことはありますか
- 質問30 質問29で「はい」と答えた方に質問します。いじめ被害を避けるためにしていたこと、心がけていたことはどんなことですか

* 質問24、25は「小学校、中学校、高等学校・高等専門学校」に分けて回答を求めた

* 質問25、28、29は「はい」「いいえ」の2件法を用いた

表4 「いじめを受けた・いじめを見たり聞いたりした」

分析対象	回答	問1	問16
高校出身(67人)	はい	6人 (9.0%)	30人 (44.8%)
	いいえ	61人 (91.0%)	37人 (55.2%)
高専出身(45人)	はい	12人 (26.7%)	24人 (53.3%)
	いいえ	33人 (73.3%)	21人 (46.7%)
合計(112人)	はい	18人 (16.1%)	54人 (48.2%)
	いいえ	94人 (83.9%)	58人 (51.8%)

表5 I 「あなた自身のいじめに関する質問」の結果

分析対象	回答	問4	問6	問7	問8	問10
高校出身 (6人)	はい	0人 (0%)	1人 (16.7%)	1人 (16.7%)	0人 (0%)	3人 (50%)
	いいえ	6人 (100%)	5人 (83.3%)	5人 (83.3%)	6人 (100%)	3人 (50%)
高専出身 (12人)	はい	2人 (16.7%)	3人 (25.0%)	6人 (50%)	1人 (8.3%)	5人 (41.7%)
	いいえ	10人 (83.3%)	9人 (75.0%)	6人 (50%)	11人 (91.7%)	7人 (58.3%)
合計 (18人)	はい	2人 (11.1%)	4人 (22.2%)	7人 (38.9%)	1人 (5.6%)	8人 (44.4%)
	いいえ	16人 (88.9%)	14人 (77.8%)	11人 (61.1%)	17人 (94.4%)	10人 (55.6%)

表6 II 「他者に対するいじめに関する質問」結果

分析対象	回答	問19	問21
高校出身(30人)	はい	20人 (66.7%)	18人 (60.0%)
	いいえ	10人 (33.3%)	12人 (40.0%)
高専出身(24人)	はい	12人 (50.0%)	11人 (45.8%)
	いいえ	11人 (45.8%)	13人 (54.2%)
	覚えていない	1人 (4.2%)	
合計(54人)	はい	32人 (59.3%)	29人 (53.7%)
	いいえ	21人 (38.9%)	25人 (46.3%)
	覚えていない	1人 (1.9%)	

表 7 いじめられている人を見た時の対応

対応	人数
何もしなかった	28 人 (51.9%)
助けた・味方になった	6 人 (11.1%)
いつもどおり接した	4 人 (7.4%)
いじめに加担した	2 人 (3.7%)
その他	4 人 (7.4%)
未記入	10 人 (18.5%)

表8 Ⅲ「いじめ予防のための指導に関する質問」の結果

対象	回答	質問24			質問25			質問27			質問28	質問29
		小	中	高・高専	小	中	高・高専	小	中	高・高専		
高校 出身 67人	○	46人 (68.7%)	44人 (65.7%)	32人 (47.8%)	58人 (86.6%)	62人 (92.5%)	55人 (82.1%)	24人 (35.8%)	22人 (32.8%)	14人 (20.9%)	7人 (10.4%)	17人 (25.4%)
	×	17人 (25.4%)	17人 (25.4%)	29人 (43.3%)	6人 (9.0%)	2人 (3%)	9人 (13.4%)	35人 (52.2%)	37人 (52.2%)	46人 (68.7%)	59人 (88.1%)	49人 (73.1%)
	不・未	4人 (6.0%)	6人 (9.0%)	6人 (9.0%)	3人 (4.5%)	3人 (4.5%)	3人 (4.5%)	8人 (11.9%)	8人 (11.9%)	7人 (10.4%)	1人 (1.5%)	1人 (1.5%)
高専 出身 45人	○	20人 (44.4%)	22人 (48.9%)	10人 (22.2%)	27人 (60%)	34人 (75.6%)	25人 (55.6%)	16人 (35.6%)	17人 (37.8%)	6人 (13.3%)	8人 (17.8%)	10人 (22.1%)
	×	19人 (42.2%)	18人 (40.0%)	31人 (68.9%)	15人 (33.3%)	11人 (24.4%)	19人 (42.2%)	20人 (44.4%)	20人 (44.4%)	33人 (73.3%)	36人 (80.0%)	30人 (66.7%)
	不・未	6人 (13.3%)	5人 (11.1%)	4人 (8.9%)	3人 (6.7%)		1人 (2.2%)	9人 (20.0%)	8人 (17.8%)	6人 (13.3%)	1人 (2.2%)	5人 (11.1%)
合計 112人	○	66人 (58.9%)	66人 (58.9%)		85人 (75.9%)	96人 (85.7%)		40人 (35.7%)	39人 (34.8%)		15人 (13.4%)	27人 (24.1%)
	×	36人 (32.1%)	35人 (31.3%)		21人 (18.8%)	13人 (11.6%)		55人 (49.1%)	57人 (50.9%)		95人 (84.8%)	79人 (70.5%)
	不・未	10人 (8.9%)	11人 (9.8%)		6人 (5.4%)	3人 (2.7%)		17人 (15.2%)	16人 (14.3%)		2人 (1.8%)	6人 (5.4%)

* 不は「不明・覚えていない・忘れた」という回答、未は「未記入」

表9 いじめ防止のための学校の指導（複数回答）

指導内容	小学校	中学校	高等学校	高専
アンケート調査	17人	20人	13人	3人
授業（道徳・保健体育等）	17人	11人	3人	0
講演会・講話・セミナー	13人	17人	14人	3人
全校・学年集会	8人	13人	4人	2人
ポスター、スローガン等呼びかけ	6人	3人	2人	0
面談	5人	3人	1人	1人
劇・ビデオ	2人	5人	1人	0
その他	4人	5人	1人	2人

表10 いじめ防止のための学級の指導（複数回答）

指導内容	小学校	中学校	高等学校	高専
学級会・LHR	9人	9人	2人	1人
授業（道徳・保健体育等）	9人	4人	1人	0
担任の話・講話	8人	4人	3人	0
個別指導・注意・面談	5人	4人	3人	0
アンケート調査	3人	4人	1人	1人
劇・本	2人	1人	0	1人
その他	4人	2人	2人	1人

表11 アンケートの形式

	小学校	中学校	高等学校	高専
無記名式	59人	66人	44人	14人
記名式	9人	8人	4人	2人

	小学校	中学校	高等学校	高専
選択式	36人	37人	24人	10人
記述式	6人	12人	4人	2人
選択式＋記述式	21人	22人	18人	6人

図 1 学年ごとのいじめを受けた数

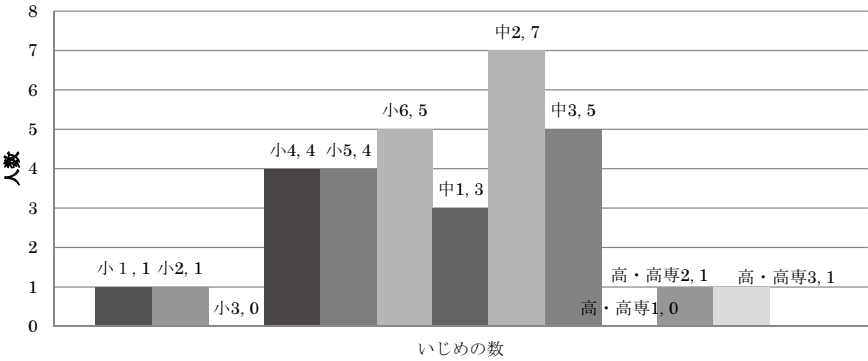


図 2 受けたいじめの様態

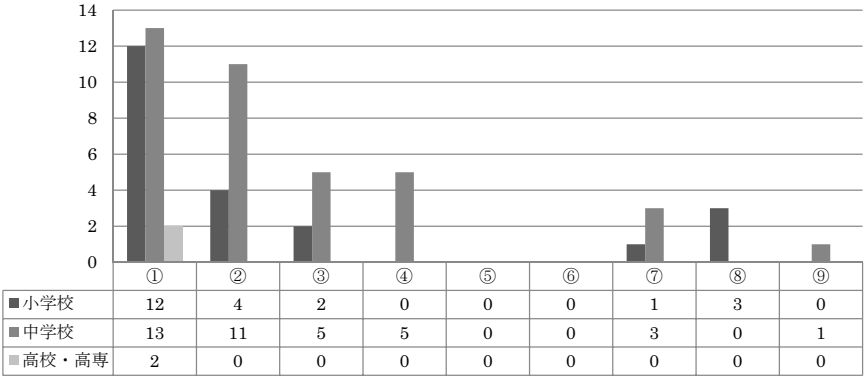


図3 学年ごとの見たり聞いたりしたいじめの数

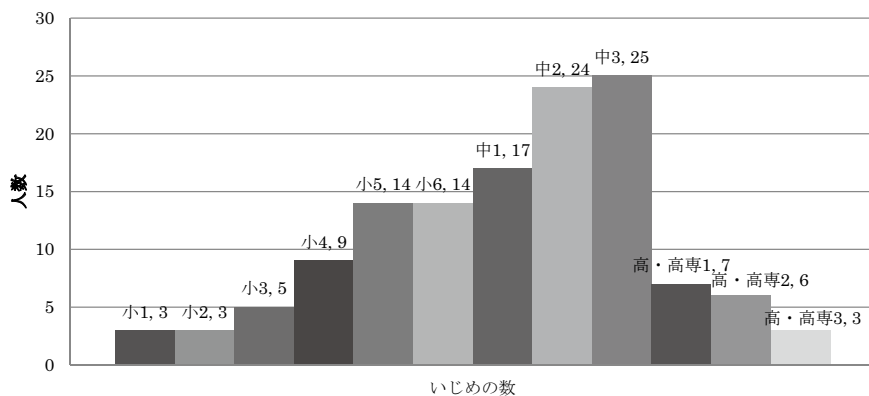


図4 見たり聞いたりしたいじめの様態

